

グローバル化と日本宗教の海外進出

ハワイ・北米における事例を手がかりに
井上順孝



一、はじめに

ハワイ・北米における日本宗教の海外布教は、太平洋戦争後、本格的なものになってきた。移民社会に大きく依存した、初期のいわば海外出張型の布教に、非日系人をも布教対象とする多国籍型の海外布教が加わって、現在の状況に至る変遷を、かつて次の三つの段階に分けて論じたことがある⁽¹⁾（なお、各教団の布教開始年については、末尾の年表を参照のこと）。

①第一波の教団の布教——一九〇〇年前後から始まっ

た既成仏教宗派や神社神道を中心とする布教の開始。主に日系人社会の習俗、慣習上必要となる。

②第二波の教団の布教——一九二〇年代から、太平洋戦争開始までの時期になされた比較的小さな仏教宗派や、古手の新宗教教団を中心とする布教の開始。日系人社会が定着する時期に対応する。

③第三波の教団の布教——戦後、一九五〇年代以降の、新宗教を中心とする布教の開始。新たな日米関係が築かれる過程で進行する。

若干補足すると、ハワイや北米への布教は、日系人移

民社会の存在を前提として始まったが、次第に日本国内における宗教分布を再構成するような形で展開した。そして戦後になって、新たな潮流が生じ、移民社会以外にも布教を行う回路が形成されたのである。そして、ほとんどの教団の場合、移民の中にいたそれぞれの宗教の信者が、現地に布教所や教会の設置とか、布教者の派遣を希望することで、海外進出が促進されたという経緯をもっている。

このように、移民社会の存在を基盤として始められたこと⁽²⁾によって、日本宗教の海外布教は、特有の経緯をたどることになった。移民社会は、海外における日本宗教の活動にいろいろな形で支援をした。そして、これは氏子あるいは檀家^{だんか}として、特定の神社やお寺を支えるというよりは、むしろ日系人社会が全体として日本宗教を支えるという構造になっていた。そこで、逆に日系人社会の意向が、宗教活動のあり方にも大きな影響を与え、という結果になった。例えば、多くの日本宗教は、日系人としてのアイデンティティを強くもつ人々によって支えられたため、非日系人をメンバーに加えることに、抵抗

であったことを考えるなら、別段、異とするに足りないのである。

ともかくも、近代以降、日本宗教は海外進出を手がけることになった。この一世紀にわたる海外布教の歴史を眺め、検討すべき課題は多々あるが、ここでは、とくに次の三点を問題としてみたい。

(1) 外国人を対象とする布教を積極的に行い、多国籍宗教化のプロセスを歩むのは、ほとんどが新宗教である。これはなぜか。

(2) 日系移民は、ハワイや南北アメリカに多いが、日系人でない外国人への布教もまた、これらの地域において目立っているのはなぜか。

(3) 新宗教を中心とした海外布教は、一九六〇年頃から多くなり、現在もますます増えつつあるが、これはどう考えるべきか。

海外布教の歴史や実態については、まだ十分と言えるほどの現地調査や、基礎的資料収集がなされていないので、これらの点についての議論も、大まかな仮説提唱の域をそれ程脱し得ないが、現時点で可能な限りの問題整

が生じる場合があった。非日系人であっても、日系人と結婚して、配偶者の所属する教会に顔を出すようになったというような人であれば、ほとんど問題は無いが、その宗教に関心をもって教会を訪れたような非日系人は、はじき出される傾向が強かった⁽³⁾。

日本は島国であるので、海を越えなければ、異民族への布教の機会が生じにくいという制約があり、これが歴史的に日本宗教の異文化体験の乏しさを形づくる主要原因となっている。それがまた、近代以降の海外布教の性格を規定することにもなったと言える。一つの宗教が、国を越え、民族を越えて、広がった例は、世界史上に数多くあるわけだが、それらは、陸続きの周囲に他民族が数多く存在する地において運動が始まり、運動の展開とともに、必然的に異なる言語の人々、異なる民族への布教がなされていった。キリスト教しかり、イスラム教しかり、仏教しかりである。さらにキリスト教を旧教、正教、新教各派において見た場合もそうである。これに比べると、日本宗教の海外布教が、近代になってようやく始まったのは、日本人の国際舞台への進出が、明治維新以降

理をした上で、さらに最近における海外布教の広まりの意味を分析するための、一視点を提起したいと考える。

二、海外進出——新宗教と既成宗教

戦前の海外布教は、南北アメリカへの移民を対象としたものの他に、日本の植民地支配、及び満蒙進出に伴うものがある。ここに加わっていたのは、大手の既成仏教宗派（とくに新たな地での開教に熱心であった浄土真宗）、神社神道、それに天理教、金光教、神理教、出雲大社教等の一部の教派神道（もしくは新宗教）であった。これらはいずれも、基本的には、海外在住の日本人（海外同朋）へのサービスという側面が強かった。しかし、少数ながら、日本人あるいは日系人以外の信者もできたが、それは主として、新宗教教団の場合である。

外国人にも積極的に布教する教団があらわれるのは、戦後になってからである。ハワイ、北米で見ると、創価学会、世界救世教、PL教団、真如苑、禅宗などが、多国籍宗教化するか、あるいはそれへの途上にある。一方既成宗教は、この時期になっても、非日系人への布教

態勢をほとんどとっていない。このように、多国籍型の海外布教が、新宗教を中心に展開してきたというのは、最初に注目したい点である。なぜそうなるのか、少し詳しく考えてみたい。

冒頭に述べた移民社会との関わりがもたらした影響は、もつとも重要な要因である。移民社会とともに展開してきた海外布教が、移民社会の特性をそのまま反映してしまうというのは、避け難いことである。移民社会が日系人としてのアイデンティティを、ある程度維持していこうとする限り、既成宗教はこれまでの布教方針を大きく転換することはないであろう。もし、外国人への布教を本格的に行おうとするなら、今までは異なつた布教ルートを作つた方が早いと考えられる。

このことは、言うまでもなく、新宗教にもあてはまる。新宗教でも、戦前から布教を始めていた教団は、移民社会との関わりが深いから、既成宗教と同じような条件の中にある。創価学会のように、移民社会とは別のルートによって、布教を始めた教団が、きわめて容易に多国籍型の布教を行ったことは、これを逆から証明しているこ

とになろう。

布教当初から移民社会に深く関わつたことが、今日の布教形態にも大きな影響を与えているという点については、以前論じたことがあり、似たような議論を繰り返すのは避けたい。⁵⁾しかしここでは、同時に、多国籍宗教化を促進する要因として、①非日系人に対する布教意図の存在、②民族的特殊性の少なさ、③布教方法の整備、の三つの要因を提起しておいたので、これらの点について議論をさらに展開させることにしたい。

一番目の非日系人への布教意図の存在というのは、つまり教団が外国人への布教を意図しているかどうかということ、そういう意図のないところに、多国籍宗教化が生じ得ないのは、当たり前である。しかし、なぜ、そうした意図をもつ教団と、そうでない教団ができるのかということが、さらに問題となる。

また、二番目の民族的特殊性の問題は、宗教の布教に当たって、その背後にある文化的要素を取り入れることが、どれ程必要になるかというふうに言い換えることができる。固有の民族文化への依存度が大きい宗教ほど、

外国人への布教は困難と想定できる。しかし、民族文化への依存度とは何かを、もう一度考える必要がある。

最後の三番目の布教方法の整備という点は、もつとも理解しやすいであろう。多国籍型の布教を推進しようとするなら、たちまち言語の問題や、専門の布教者養成の問題が起るのであり、これらの問題の克服は、布教者個人の努力の限界を越える。教団としての支援態勢が整っていないければ、到底実現は難しい。外国人への布教を積極的に推し進めようとする教団は、そのための手段を考える筈であるから、①と③は連続した過程として捉えることができる。

こうした点を念頭に置きながら、既成宗教と新宗教とで、海外布教に大きな差がある理由について考察する。

まず、神社神道であるが、これは外国人への布教意図をもたないし、民族宗教であるので、日系人社会以外には広がり得ないことに對し、特別の考察を必要としないと思われる。そうした布教意図をもたないから、そのための態勢が整っていないのは、言うまでもないことである。また神社神道においては、民族文化への依存度が大きい

ことも明らかである。つまり神道は、明確に言語化するのが困難な日本的宗教意識、あるいは宗教感覚を基盤として存続している。そして宗教という面と、習俗としての面とを兼ね備えている。現在においても、戦前の影響で、「神社は宗教に非ず」という考え方を保持しようとする神道関係者もいるので、外国人に対する布教という発想自体が、神社神道の中からは出てきにくいという構造になっている。

けれども、実際にハワイで神職を勤める人の中には、まれに神道の国際化を考える人も出てきた。⁶⁾結果としては、それは成功していないのであるが、そのような発想が生じたのは、実は日系人三世、四世におけるアメリカ化が、急速に進行したことへの危惧が、背後にはあったと考えられる。従って、本格的に多国籍宗教化を目指したというわけではないのである。神社神道は、その本来的特性ゆえに、本来外国人への布教が困難な型の宗教であることは、明白である。

仏教宗派の場合はどうであろうか。布教意図という点では、宗派によっては、ある程度の外国人布教を試みた

例がある。実際に、アメリカ西海岸では、禪宗は、ゼンセンターとして、白人を中心としたメンバーを多く集めているし、ヨーロッパでも弟子丸泰仙が始めた禪道場は、ヨーロッパ人の関心を惹いたことが知られている。けれども全体的に見るなら、外国人への布教意図が皆無ではなかったとしても、實際上それを実現するための、組織的態勢は整っているとは言い難い。現実問題としては、日系人三世、四世に対する対応でさえ、とまどっているところが多い位であるから、まして、純然たる外国人への布教手段は、組織的に形成されてはいない。こうした背景には、日本仏教の特質があると考えられる。

仏教はもともと世界宗教の一つに数えられる。しかし、それは仏教を全体として眺めた場合であって、中国仏教、朝鮮仏教、日本仏教、チベット仏教として考えると、また違った評価も必要になると思われる。日本仏教の民族宗教化が、かなり進行していることは疑いえないことである。とくに近世を通じて、葬式仏教化が進行し、檀家制度が定着すると、日本社会の構造を前提とした宗教という特性が、強まったと言える。

っている。また仏教系新宗教は、一部の教団が海外布教の態勢を整えつつある。こうしたことから、日本仏教を全体として見れば、仏教の多国籍化も観察できると言えるが、既成仏教宗派に限れば、多国籍化は一般にほとんど進行していない。

では、仏教系神道系を問わず、新宗教の一部は、なぜ比較的容易に多国籍型の布教をなしたのであろうか。新宗教は近代日本において、新たに運動を開始し、その組織を拡大することによって、既成宗教に割りこんできたという歴史をもつ。いわば市場開拓には慣れているとも言える。具体的に言えば、まず国内における活動によって蓄積された布教方法が、海外布教においても、ある程度通用したということが挙げられる。また、海外布教で多くの非日系人メンバーを集めている教団は、天理教の場合を除くと、ほとんどが、日本においても戦後大きくなった教団である。このことは、新宗教であっても、教団が布教に大きなエネルギーを割く運動段階にあることが、必要であることを物語っている。

さらに、新宗教の布教の特色は、創価学会などの若干

日本仏教は、いわゆる葬式仏教（回向寺）として存続するほか、観光寺として、あるいは祈禱寺として、存在すると言われる。観光寺は、つまりその存在が文化的あるいは歴史的価値を認められてのことであるので、海外布教とは関わりのない存在である。また、祈禱寺的形態は、日本人の病氣観、あるいは呪術観等に依拠した存在であるので、これを外国人に布教するとなると、背後の病氣観や呪術観をも受け入れてもらわなければならない。葬式仏教も、前二者と同様に、やはり葬法や他界観をも、受け入れられる必要があるから、外国人への布教が容易でない。事実、アメリカにおいてもブラジルにおいても、非日系人には、仏教のこの面は受け入れられていない。

残る仏教の形態は、人間観・世界観としての仏教（仏教思想）、あるいは行法としての仏教（坐禪）、あるいは大衆運動としての仏教（仏教系新宗教）ということになる。このうち、仏教思想が海外において広まったものとして、鈴木大拙の例が有名である。坐禪は先に述べたように、ゼンセンター、あるいは禪道場という形で広ま

の例外を除いて、既存の宗教との共存関係の中に進められていることである。通常新宗教の信者は、入信したからといって、例えば氏子であることをやめたり、檀那寺と縁を切ったりはしない。また他の新宗教との重複所属は珍しくない。こうしたあり方が、海外布教においては、土着化を促進する方向に作用したと考えられる。例えば、キリスト教会との重複所属を気にしないというような方針は、南北アメリカの布教においては、非日系人信者の獲得に当たっては、有利に作用したと考えていいだろう。ブラジルにおいて、PL教団、生長の家、世界救世教、崇教真光といった、重複所属をほとんど気にしない新宗教が、かなりのブラジル人を得ている背景には、一つにはこうしたことを考えなければならぬ。

三、布教対象としての南北アメリカ

次に、南北アメリカが、海外布教の主要な対象地域となっているということについても、移民社会の存在が最大の理由であることは、否定しえない。ハワイ・北米への移民は、明治半ばから盛んになり、それからまもなく、

日系人社会に宗教各派が進出する。初期はむしろ移民の側から要請が強かった。やがて、日系人社会と日本宗教とは密接な関わりを築きあげ、それは今なお続いている。世代の更新に伴い、アメリカ化する日系人も増えてくるが、日系人社会は依然として明確な輪郭をもって存在している。現在、加州、ハワイの日系人は、それぞれ約二十数万⁽⁷⁾人という。アメリカ社会のサラダボール⁽⁸⁾の性格が再認識されることにより、日系人が自らの文化的ルーツを見直す傾向は保たれており、日系人のアイデンティティを確認する場としての機能を、神社なり仏教会が果たしているという状況は、今後も続いていくと思われる。だが、アメリカ合衆国に関して言えば、移民社会という存在の他に、日米の戦争という悲劇的歴史も、また日本宗教の進出に関わりをもつことになった。つまり、日本の敗戦の産物といえる国際結婚者の増加は、創価学会を中心とした新宗教の進出に、一つの足場を提供したのである。戦後の連合軍の日本占領により、アメリカ人と結婚する機会をもった日本人女性はかなり多かった。そうした女性が、とりわけ創価学会のアメリカ進出に際し

て、一つの拠り所となった。

ところで、移民とか、戦争というのは、宗教史の展開とは関わりのない、偶然ともいえる歴史的事実である。海外布教も、こうした歴史的事実にと左右されることを如実に示しているが、すべてをその所産に帰するわけにはいかない。布教対象となった地域の宗教文化上の特性というものも考慮せねばならない。まず、南北アメリカは日本以外からも多くの移民を受け入れており、異なる民族の併存、つまりは異なる宗教の併存に、比較的寛容な国であったということを、条件の一つとして挙げなければならない。もちろんアメリカは、WASP（ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント）がいろんな分野で主導権を握る国であるが、それでも宗教的な寛容は、ヨーロッパに比べれば、ずっと進んでいると言われる。また、ブラジルはカトリックが支配的な地域であるが、多くの移民を受け入れており、宗教的寛容度はより大きいとされる。

ここで海外から日本にやってきて、布教をしている宗教について考えてみることも一つの参考となる。キリス

ト教各派の日本への布教は明治維新前後からであるが、これとは別に、一般にアメリカ産のセクトとされる末日聖徒イエス・キリスト教会（通称モルモン教）、エホバの証人、セブンスデー・アドベンチストなども、戦後盛んに布教を試み、それぞれ数万人あるいはそれ以上の信者を得ているとされる。キリスト教は依然宣教を主体とする宗教であり、それが日本を布教の地に選ぶのは当然であるが、日本がこれを受け入れた理由を考える際には日本と西洋文化との関わりをも考慮しなければならない。開国以来、日本は西洋の文物を輸入するに熱心であった。明治期におけるキリスト教各派の進出は、そうした基盤の上になされたと言える。また今日においてモルモン教等の布教が盛んであることに関しては、日米間の文化的関わりが強まっていることに、その理由の一つを見出さなければならない。

さらに古くに目を向けるならば、古代から近世にかけて、日本が朝鮮や中国から仏教を受け入れ続けたのは、当時にあつての先進文化を受け入れるという営みの一環としてなされたと解釈できるのは、言うまでもない。

戦後においては、他方、韓国宗教の布教が注目される。韓国産のキリスト教系新宗教である、世界基督教統一神霊協会（通称統一教会）の活動や、最近盛んな趙鏞基^{チョウヨンギ}の布教の経緯については、まだ十分な研究がなされていないが、日本には、多くの韓国人、朝鮮人がいることが、韓国宗教の進出の条件の一つになっているという見方は、当然でてくるであろう。

これらが示唆するのは、ある国の宗教の他の国への進出を促進する条件として、①両国間における人的交流の状況、および②文化的関係のあり方、の二点を考慮する必要があるということである。日本宗教の海外布教では、①の面が前面に出ているが、アメリカやブラジルの文化的背景、また日米、日伯の文化的関係といったことも問題とせざるを得ないということである。アメリカにおいては、戦前は、日本人あるいは日本文化は、黄禍論などもあつて、かなり差別的待遇を受けたのであるが、戦後は、西海岸を中心に東洋ブームが興ったり、日本の経済発展があつたりして、価値観がかなり変わったと思われる。ブラジルでは、一貫して日本文化は好意的に迎えら

れているようである。

四、戦後の海外布教とグローバル化

さて、新宗教を中心とした多国籍型の海外布教は、一九六〇年頃から始まり、最近もますます増えている。布教形態も多様化の兆しを見せ、創価学会のように、NSA（アメリカ日蓮正宗）とかNSB（ブラジル日蓮正宗）という具合に、それぞれ独立的組織を各国に作っていく場合もあれば、白光真宏会のように、もっぱら海外各地にピースポール⁽⁸⁾を建てることを差し当たっての目標とし、敢えて組織化を目指さない運動を展開する場合もある。

日本宗教の海外進出が最近次第に活発になってきている要因の一つとして、経済成長を考えないわけにはいかない。というのも、日本宗教の国際化は、企業の海外進出、日本文化の海外への紹介と、ほぼ歩調を揃えているからである。経済の成長、それに伴う自文化への自信、海外布教を行うだけの経済的基盤の確立といったことが、多国籍型の布教を行う条件の一つになっていると考えられる。

の組織形態などは、どこの国でも似てくる。

言語や習俗、宗教となると、グローバル化は容易には進行しないと考えられるが、情報化時代となって、幾分の変化も生じつつあると考えられる。そして、この点が、最近の日本宗教の海外布教を、敢えて多国籍宗教の名で呼ぶゆえんでもある。

歴史上、宗教が異民族に広がった例は、数多いが、それは教団宗教が、それが確立していない地域に広まるという形をとった場合が大勢を占める。こうした過程は、梅棹忠夫の表現を借りれば、免疫のない地域への「流行性（エピデミック）の」宗教の広まりであって、世界中に教団宗教が広まる過程は、主にこれによったと言える。土着の教団宗教が形成されていなかった地域ほど、いわゆる世界宗教の影響が大きかったことが、これを証明している。これに対し、最近のセクトやカルトと呼ばれる宗教を含めた、新宗教運動は、すでに教団宗教が確立している地域への布教が特徴であり、いわば新たな市場再編成を狙うが如きものである。当然宗教文化の高低差を利用したかのような世界宗教の広まりとは、いくらか異

だが、宗教運動の国外進出という現象は日本宗教に限られたことではないようである。アメリカには、チベットの仏教の進出や、韓国の統一教会の進出もある。また、アメリカで興った新宗教が、ヨーロッパに進出している例もある。こうした世界的に見られる宗教運動の多国籍化現象と、日本の新宗教の海外進出は、どこかに共通する潮流を有している可能性がある。それを、最後にグローバル化の観点から論じてみたい。

グローバル化とは、製品や技術、あるいは組織・制度や思想などが、地球的規模の中で、競争原理と市場原理によって展開していくようになる過程として規定したい。分かりやすい例を挙げるとするなら、技術がたどる道筋を考えればよいであろう。技術は、誰が発明したものであれ、国境を越えて容易に広がる。ある状況のもとで、より効率のよい技術は他のものを駆逐していく傾向にある。最終的には、人類にとって一種の共有財産となる。食べ物や嗜好品もこの道筋をとりやすい。コピーや煙草がたどった運命を考えればよい。集団の統率原理などは、形のない技術という側面がある。だから、軍隊

なった布教過程が展開していると考えられる。これは宗教現象において、グローバル化の過程が進行している証拠であると考えたい。もちろん、宗教におけるグローバル化が、過去においては全然なかったと言っているわけではない。あくまで支配的なトーンの変化として述べているのである。

最近の新宗教の海外布教をグローバル化の観点から眺め直すと、日本宗教は、宗教の自由競争市場に加わりつつあると言つてよい。この場合、移民社会は、そうした市場開拓の足場として再評価することが可能である。つまり、移民社会は、非日系人社会に対して、ある面では閉じているが、ある面では多様に開いている。日系人は、一方では確かに日系人同士で固まるという傾向を示してきたが、他方でアメリカ社会なりブラジル社会なりで、現地の人々といろいろな関わりを形成してきた。学校教育の場、非日系人との結婚、職場でのつきあい、友人関係といった回路を通して、全体として多様な人間関係ができていく。そうしたネットワークは、宗教の多国籍化にも有利に作用すると考えられる。そうしたものがない

国での布教を想定すれば、それはすぐ分かる。あらゆる分野におけるグローバル化の進行との関わりにおいて、最近の海外布教を見直すと、南北アメリカのみならず、ヨーロッパやアジア各地に、新宗教が少しずつ信者を増やしているという実情にも、説明がつけやすくなる。

五、結び

こうしてみると、太平洋戦争後、新宗教を中心とした海外布教が、南北アメリカを中心に、ますます盛んになってきているという状況の構成要件のすべてが、グローバル化との関連において理解できる。新宗教は、グローバル化に適した構造をもっているし、南北アメリカ、特にアメリカ合衆国は、多くの宗教が共存し、グローバル化を促進しやすい条件を備えている。また戦後は、国際的規模で情報化が加速度的に進んでいる。情報化は、グローバル化の進行にとっては、最も重要な促進要因である。ところで宗教に関してのグローバル化は、概念や思想のレベルでも想定できるし、また制度や組織、さらに生活スタイルのレベルでも想定できる。神と天使とい

った概念がグローバル化のプロセスを辿る例は、古くから観察されるし、例えば聖職者集団によって運営される教会といった組織形態についても同様である。だが、今日の宗教運動が示すところは、グローバル化は、主に生活スタイルの次元で目立っているということである。⁽¹⁾

つまり、現代においては、全体社会をコントロールするシステムは、俗的な政治権力が担うというのが世界の大勢である。そうした地域においては、もはや宗教は社会システムの全体に関わりをもっていない。⁽²⁾ こうした状況の中で、一つの宗教運動は、他の宗教運動に比べた場合の、利点を訴えるという形で、布教が行われることになる。そこでは宗教理念の相対化が、逃れ得ないものになってくる。

日本の新宗教の多くは、社会改革を目指すより、個人の生き方を変えることをアピールすることで、日本社会への定着を果たしつつある。しかも、この傾向は戦後の新宗教において目立っている。グローバル化の観点から言えば、新宗教のあり方は、近代日本の宗教運動の特性というにとどまらず、グローバル化の中で必然的にあら

われてくる、一つのタイプということになる。

一つの有用な技術が世界中に受け入れられる過程から類推すれば、宗教現象におけるグローバル化の進行は、宗教運動の多国籍化から、さらに無国籍化を要請すると想定できる。実際にそのプロセスが出現するかどうかは別として、情報化と人間の交流がさらに進めば、宗教運動の無国籍化は考えられないことではない。そこでは、宗教運動の受け入れに当たって、それがどこの国に発した運動なのかとか、誰が創始者であるかは、問題とならず、その宗教の活動のあり方が、当地の人々にとって好ましいと感じられるかどうか、もっとも優先される選択の基準となると想定される。日本宗教の海外布教が、そうした性格を帯びてくるかどうかについては、もう少し観察を続けたいと議論はできない。

註

(1) 拙著『海を渡った日本宗教——移民社会の内と外』(弘文堂、一九八五年)を参照。なお、おおまかに言えば、海外出張型の布教とは、海外に在住の日系人や日本人を対象とした布教であり、多国籍型の布教とは、本格的に

外国人を対象とした布教である。詳しくは、拙著を参照のこと。

(2) この点は、南米の場合も同じである。南米の事例については、中牧弘允著『新世界の日本宗教』(平凡社、一九八六年)を参照。

(3) その典型が北米のゼンセンターの事例である。北米の禅宗寺院は、他の仏教宗派と同じく、先祖供養を中心に日系人社会に根づいていたので、坐禅を目的に訪れた日系人は、結局、受け入れられなかった。そこで別に彼らのためのゼンセンターができていったのである。これについては、星野英紀『アメリカ的サンガの展開——禅センターの現状と分析』(『大正大学研究紀要』六八、一九八三年)を参照のこと。

(4) 日本宗教の海外布教に関する実態調査は、一九七〇年代後半から盛んとなってきた。主なものとしては、柳川啓一を代表者とするハワイ、カリフォルニアでの共同調査の他、中牧弘允のブラジルにおける調査、竹中信常を代表者とするハワイでの共同調査、大久保雅行のメキシコにおける調査、白水繁彦によるシンガポールにおける調査、山田裕のオーストラリアにおける調査などがある。その結果を発表した研究文献については、参考文献を参照のこと。

(5) 拙著前掲書参照。

(6) これについては、拙論『異文化内状況と神社神道』(柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系人社会と日本宗教』)

ハワイ日系人宗教調査報告書」(東京大学宗教学研究室、一九八一年、所収)を参照。

(7) アメリカ社会は「人種のもつぱ」とする説に対するもので、アメリカ社会は、多様な民族文化を一つに解け合わすのではなく、それぞれの素材は生かしたままで、全体として一つのまとまりを作っているという説。ちょうど、サラダの盛り合わせに似ているということで、このような表現となる。

(8) 「世界人類が平和でありますように」を各国語に訳した文字を書いた柱。同会は、国内においても、同様の運動を展開している。

(9) グローバル化という概念の使用に当たっては、R・ロバートソンなどが使用しているグローバリゼーションという概念に影響を受けているが、グローバリ化という場合は、これを自分なりに規定し直して用いている。

(10) 梅棹忠夫「文明の生態史観」(中央公論社、一九七二年)参照。

(11) こうした見方からすれば、明治期のキリスト教の進出形態もそうであり、これは日本国内の宗教史の展開から言えば、明らかにグローバリ化の開始であったと言える。

(12) K・ドベラーレの言うピラー化(pillarization)現象も、こうした過程の一つとして考えられる。

参考文献(実態調査文献。なお註で紹介した分は除く)

石井研士「米国解脱教会——日系新宗教の変容」(パイロン・エアハート・宮家準備「伝統宗教の再生——解脱会

の思想と行動」(名著出版、一九八三年、所収)

井上順孝「ノスタルジア脱履の世代——ハワイ日系宗教の教団・世代比較」(『国際宗教ニューズ』一六三・四、一九七八年)

同「ハワイ日系宗教の模索とジレンマ」(宗教社会学研究会編「現代宗教への視角」、雄山閣、一九七八年、所収)

同「異文化の中の新宗教運動」(『宗教研究』二四九、一九八一年)

同「北米における金光教の展開(上)(中)(下)」(『神道宗教』一〇七、一〇九、一一〇、一九八二—三三年)

同「アメリカにおける創価学会の布教とメンバーの変容」(竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会「宗教文化の諸相」、山喜房佛書林、一九八四年、所収)

同「東回りの西洋布教——日本仏教のアメリカ進出」(孝本賞編「論集日本仏教史9大正・昭和時代」、雄山閣、一九八八年、所収)

大久保雅行「メキシコ日蓮正宗における改宗過程の社会心理学的分析」(『東洋哲学研究所紀要』二、一九八六年)

同「NSMにおける回心過程と態度変容」(同前、三、一九八七年)

同「異文化における日系新宗教の受容と変容」(『宗教研究』二七三、一九八七年)

同「日本宗教の受容と経済生活——メキシコにおける

天理教と創価学会の事例——」(『宗教情報』二二、

一九八八年)

栗田靖之「カリフォルニアの盆踊り」(『季刊民族学』二二、

一九八二年)

白水繁彦「東南アジアにおける「日系宗教」の普及」(窪徳

忠編「東南アジアの文化と宗教」、耕士社、一九八一年、所収)

竹中信常編「ハワイ浄土宗教団事情調査報告書」(一九八二年)

中野毅「アメリカ社会とNSA——ハワイの事例」(『教学研究』2、一九八一年)

同「アメリカ社会とNSA——米大陸での発展(その一)」(『東洋学術研究』別冊、一九八四年)

中牧弘允「移民と宗教——ハワイ日系宗教と真宗教会」(『歴史公論』一九七九—一九七九年)

同「地蔵の語るハワイ日系移民の歴史」(『季刊民族学』四二、一九八〇年)

同「ハワイにおける女性霊能者と民間信仰——オアフ島の女性霊能者の事例」(国立民族学博物館研究報告「五」一、一九八〇年)

同「アメリカにおける東洋系宗教の受容」(『民博通信』七、一九八〇年)

同「日系キリスト教会の展開と日系キリスト教徒の意識——カリフォルニア州サクラメントの事例」(『国立民族学博物館研究報告』八一、一九八三年)

同

「ブラジルにおける日系多国籍宗教の現地化と多国籍化——パーフェクト・リパティ教団の場合」(中牧弘允編「研究レポートIX、ブラジル日系宗教」、一九八五年、所収)

同

「在家門徒の出家——ブラジルの事例から」(『海外移住調査研究レポート』、広島都市生活研究会、一九八五年)

同

「地球時代の仏教——ブラジル」(『仏教』四、一九八八年)

星野英紀「アメリカ日系人社会とロスアンゼルス高野山米国別院」(『密教学研究』一五、一九八三年)

柳川啓一・森岡清美編「ハワイ日系宗教の展開と現況——ハワイ日系人宗教調査中間報告書」(東京大学宗教学研究室、一九七九年)

同

「ハワイ日系人社会と日本宗教——ハワイ日系人宗教調査報告書」(東京大学宗教学研究室、一九八一年) Keichi Yanagawa ed., *Japanese Religions in California: A Report on Research Within and Without the Japanese American Community*, Department of Religious Studies, University of Tokyo, 1983.

山田裕「アメリカとオーストラリアにおける日本の新宗教」

(『現代における宗教間の葛藤と協調』、佼成出版社、一九八八年、所収)

鷺見定信「開教区記録」にみられたハワイ浄土宗」(『宗教文化の諸相』、前掲所収)

年	ハワイ	米本土	関連事項
一八六八	浄土宗		二元年者の移住
八五	浄土真宗		官約移民の開始
九四	浄土真宗		私約移民の開始
九六	浄土真宗		
九七	浄土真宗		
九八	浄土真宗		
一九〇〇	浄土真宗		
〇一	日蓮宗		自由移民の開始
〇四	曹洞宗		
〇五	ハワイ大神宮		
〇八	ラハイナ大神宮		呼寄せ移民時代
一一	加藤神社	真言宗	
一二	石鎚神社	日蓮宗	修養団
一三	真言宗		
一四	マウイ神社		
一五	天台宗		
一八	天理教	曹洞宗	移民禁止時代
二二	天理教		
二四	天理教		
二七	天理教		
三〇	天理教		
三六	天理教		
四一	天理教		

一九四五	天眞道	解脱会	太平洋戦争終戦
五〇	天眞道		
五一	天眞道		
五二	天眞道		
五三	天眞道		
五四	天眞道		
五五	天眞道		
五九	天眞道		
六〇	天眞道		
六四	天眞道		
七〇	天眞道		
七一	天眞道		
七二	天眞道		
七三	天眞道		
七四	天眞道		
七八	天眞道		
八二	天眞道		
八四	天眞道		

※この他、最近では、白光真宏会や阿含宗も北米布教を行っている。なお、布教開始年は基準を定めるのに困難さがあるが、一応、教会・布教所もしくはそれに準ずるものの設置年とした。

（いのうえ のぶたか・国学院大学助教授）